

「いい声」と「高齢者の声」の関連

—朗読が目指す声を探して—

愛知大学コミュニケーション学部 准教授
博士（文学）高村めぐみ

1. はじめに

現在の日本では、高齢化が急加速している。高齢者が生き生きと生活するために、私たち一人一人ができることを真剣に考え、必要なことは早急にすべき時期が来ている。高齢化の影響が最も大きい介護や福祉の現場では、生活するために必要最低限の「衣食住」に関わることを以外にも、カラオケ、フラワーアレンジメント、陶芸、書道、俳句といった娯楽の実施について活発な議論がなされてきている（みんなの介護 online）。娯楽は、個々人の能力や好みに依るところところが大きいため、選択肢を増やすという意味でも、幅広い内容の様々な種類の活動が準備できることが理想だろう。

本研究会では、高齢者が生き生きと生活するための手段の一つとして、朗読に着目をしている。年を取るとともに、声やことばに関する悩みを持つようになる人は少なくない。この悩みを少しでも解消できればと考え、現在、私たちが取り組んでいるのが「声年齢の評定尺度化」である。これは、脳年齢、体年齢、肌年齢、筋年齢…と同様に、言語音の声年齢を評価する方法（城生 2017）のことを指し、現在、確立に向けて研究を行っている。科学的に声年齢を評価する方法を解明することを通して、最終的には、カラオケや浪曲など声を出す活動が好きな高齢者はもちろん、今まで声を出すことに興味なかった人にも、朗読を経験してもらうことで、自分の声で活動することの楽しさを知ってもらいたいと考えている。

さて、研究会のメンバーには朗読を指導する者も多くいる。では、朗読を指導する立場に立った時、私たちはどのような声を目標に定めるべきなのだろうか。朗読と聞くと、アナウンサーのような「いい声」で「上手に」読まなければならないと想像するかもしれない。だが、目的、内容、（視）聴者、伝達手段など、多くの面で相違点があるアナウンサーの「原稿読み」と「朗読」の目標を同一視してしまっているのだろうか。

本稿では、「いい声」に関する先行研究を概観することによって、どのような要素がいい声の判断に関わっているかを韻律と声質の2点から考えてみたい。さらに、朗読の時に求められる「いい声」には、どのような要素が必要とされているのかを考察する。

2. 「いい声」の先行研究

まず、新井(2011)を概観しつつ、いい声の要因について考える。

「1. はじめに」では、対人コミュニケーションにおいて、話し手の声は外見的な特徴と同じように強いイメージであるため、印象評価に大きな影響を与えると述べている。さらに、性差については、男性よりも女性の方が声により敏感で、はっきりした印象を持つ傾向にあると述べ、これらを根拠とし「2. 方法」で「女性から見た男性のいい声」について、心理言語学的、および音響音声学的なアプローチで研究を進めると述べている。

声の評価について男女差があるかは、非常に多くの要素が絡んでいるため定かなことは言えないが、話者を男性、聴者を女性に特定することで、性差による好みの違いを排除しようと試みていると解釈できる。

「3. 心理言語学的アプローチ」では、「女性のイメージする男性のいい声の意識調査」についての実験方法が書かれている。被験者は10代後半～20代前半の女性51名で、大きく分けて2つの質問を紙面によるアンケート調査を行い、明らかにしている。2つの質問は以下のとおりである。

Q1. いい声だと感じる男性有名人（複数回答可）

Q2. いい声だと思う声の性質について17のチェック項目から選択（複数回答可）

- ①低い声、②芯のある声、③少しとがっている声、④しっかりしている声、
- ⑤鼻にかかった声、⑥だみ声、⑦セクシーな声、⑧ハキハキしている声、
- ⑨温かみのある声、⑩渋い声、⑪若々しい声、⑫透明感のある声、⑬厚みのある声、
- ⑭落ち着いた声、⑮なめらかな声、⑯よく通る声、⑰ハスキーな声

質問の答えは以下のとおりである。Q1については、福山雅治、玉木宏など18名の有名人の名前があがっているが、福山雅治、玉木宏の2名は3位以下に大きく差をあけて、いい声だと感じる男性有名人として筆頭に名前があげられている。

Q2については、二項検定の結果、①低い声、⑭落ち着いた声の2項目が「いい声属性」として評価され、反対に②芯のある声、③少しとがっている声、⑤鼻にかかった声、⑥だみ声、⑧ハキハキしている声、⑪若々しい声、⑫透明感のある声、⑮なめらかな声の8項目が「非いい声属性」と評価されるという結果になったと述べている。そして、これらの結果から、「ある程度人生経験を踏んだ包容力のある男らしい大人の男性像を想起させる項目」がいい声の特性であり、「若く未成熟な男性像を想起させる項目」と「非男性的（女性的・中世的）な男性像を想起させる項目」が非いい声特性である、と結論付けて

いる。

若い女性の考えるいい声のイメージは、これら2つの質問から、ある一定の基準では明らかになっているように見える。だが、Q1の回答は有名人から選んでもらっているため、必ずしも声だけではなく、容姿、イメージ、(俳優なら)役柄など他の要素がかなり強く含まれたうえで「いい声」としてみなしている可能性は否めないだろう。

次に、「4. 音響音声学的アプローチ」では、「3. 心理言語学的アプローチ」のアンケート調査Q1で名前のがあった福山雅治、玉木宏の2名が担当するラジオ番組を録音し、いい声の資料として採取し、音声分析を行っている。さらに、いい声の男性との差異を探るため、一般男性8名(10代後半～30代)による談話を録音している。

ここで、両者の資料の質について指摘しておきたい。有名人の談話はラジオ番組で話された声のため、常に目の前にはいない聴者(リスナー)を意識して話をしている。それに対して、一般男性の談話は、筆者に向かって話している資料と話者が一人で録音している資料が混在している。そのため、一般男性の資料間でも発話の質に差がある可能性がある。そして、公共性、話題、内容、収録環境などの点からみると、有名人と一般男性の資料の間には違いがあることを指摘しておく。

新井は次に、いい声の有名人2名、一般男性8人分の資料からそれぞれ約1分間を抽出し、発話単位(=「句」)で区切り、各句のピッチと音圧の最高値、最低値を測定し、いい声の有名人2名にのみ現れる特徴を模索している。その結果を「5. 結論」では、音響音声学的アプローチの結果から「いい声」には、ピッチが低く、ピッチ幅が大きい傾向が認められ、かつ、句の中の最低ピッチが低く、高低の抑揚が豊かであるという特徴があると述べている。

筆者が読んだ限り、確かにいい声の有名人2名は、一般男性8名に比べてピッチ最低値が高く、ピッチ幅が大きい。だが、前述したように、ピッチの高低は声のよし悪しより、むしろ、話す場面、内容、話題、相手、収録環境によって変化する可能性の方が大きい。つまり、この結果からいい声の評価が、ピッチ、音圧、速さといった韻律に関わる要素と関係があると結論付けてしまうのは難しい部分があると言える。

さらに、「Q2. いい声だと思ふ声の性質について17のチェック項目」であげられた特徴を見ると、韻律よりも、むしろ声質¹(声帯の形状、サイズ、伸展状態、声門閉鎖の強さ、振動様式声帯)や呼吸の仕方などが大きくかかわっていることが推測される。つまり、いい声とは、韻律のみならず、声質も深く関係していると考察ができる。

¹ Laver(1980)は、声質とは話者の声の特徴や声道、鼻腔、声帯の音声器官全体の特徴をあらわした声の質のことを指す、と述べている。

3. 朗読が目指す声

ここで、冒頭で述べた「朗読の時に求められるいい声には、どのような要素が必要とされているのか」について、特に高齢者が生き生きとした生活を送るための一つの手段として朗読を行う場面を想定して考えたい。結論から言うと、声質にせよ韻律にせよ、まずは、いわゆる「いい声」を目指すよりは、聞き手に「届く声」を目指すべきだと考える。

「届く」というのは、物理的に相手の聴覚器官に音波が伝わり鼓膜を震わせる、という意味であると同時に、相手に心に届く（響く）声という意味である。相手の心に届く声を出すのに、アナウンサーのような「いい声」は必ずしも必要であるとは限らない。なぜなら、アナウンサーの原稿読みの目的は、多くの人間にとって聞きやすく、内容が分かりやすい声を出すことであり、朗読のような心に訴える発声は不必要である場合が多いからである。さらに、原稿読みが文字言語を音声化する活動であるのに対して、「私たちの目指す朗読」は、文字言語からは伝わらない喜怒哀楽、さらには高等感情さえも声に含めることで、相手に自分の思い、感情、意志などを伝えることができる活動だからである。

物理的にも心理的にも聞き手に「届く声」を出すには、音声器官によるところが大きい。そして、これは生まれ持った性質にも大きく左右される。だが、声を出す行為が筋肉を使う行為であることを考えれば、練習によって変わる部分もあると考える。発声に必要な筋肉を鍛えることで、私たちは、まずは物理的に相手に届く声を出すことができるようになると思う。

そして、心理的に相手の心に「届く声」に必要な要素は数多くあるだろうが、その一つに「聞き手」があると思う。場面、内容、相手等によって、聞き手の評価は異なるだろうし、話し手・聞き手の属性（性別、年齢、出身地、社会位相など）によっても心に響く声の評価は異なる。これは、話し手が思う「心に届く声」と、聞き手が思う「心に届く声」が常に一致するとは限らないことを意味する。だから、究極的には、多くの要素に相応しい声を、相手の立場に立って瞬時に出せる技術が必要なのである。物理的に届く声が生まれ持った性質に大きく左右されるのに対して、心理的に届く声は、練習によってのみ得られると考える。朗読に携わる者は、これらの点を忘れないでいたい。

4. まとめ

今回、韻律面からいい声の特徴を探った先行研究を概観したが、韻律だけで声の良し悪

しを評価することは難しく、声質を研究に含めなければならないことが示唆された。また、一言で「いい声」と言っても、それが誰にとって、どのような場面で「いい声」なのかを考えるべきであるという結論に達した。さらに、朗読現場において「いい声」と評価される重要な要素は何かという点、それは、物理的にも心理的にも相手に「届く声」であるという考えに至った。今後も本研究会では、「届く声」を朗読が目指すべき声の一つの要素であると認識しつつ、生き生き生活する高齢者の一助となることを目指す。

【文献】

新井麻未(2011)「女性からみた男性の『いい声』に関する心理言語学的・音響音声学的アプローチ」、『多文化・共生コミュニケーション論叢6』pp. 51-62

城生佰太郎(2016)「『声年齢』の評価に関する音声学的研究(1)」,「声と健康」に関する研究成果, <http://www.gengoro.net/sp/pdf/voiceage.pdf> (2018/2/26 アクセス)

みんなの介護, <https://www.minnanokaigo.com/guide/recreation/> (2018/03/14 アクセス)

Laver, J., Phonatory settings. *The phonetic description of voice quality*, Ch. 3, pp. 93-135, Cambridge University Press, 1980.